

- ・ピルをめぐる日本社会の変遷
～ピルとともに生きる時代になって～
- ・私のオフタイム
～絵本の読み聞かせを通して～

ピルをめぐる日本社会の変遷 ～ピルとともに生きる時代になって～

初めてピルが登場して

院長 村口喜代

世界で初めてピルが発表されたのは1955年、東京で開催された第5回国際家族計画会議だった。ピルを開発したピнкаス博士は、「プロゲステロン」剤が強力な排卵抑制効果をもたらすことを発表した。薬剤による避妊法に初めて触れた日本の専門家たちは大きな驚きとともに戸惑いを感じた。日本社会に受け入れられるにはとても長い時間がかかった。

日本社会とピルの二重構造

私が医師になったのは1970年だったが、当時はすでに中用量ピルが治療薬として使われるようになっていた。1971年田中角栄首相は「安全性についてはなお疑問が残るので、・・現段階では避妊薬として認める考えはなく、・・使用者（医師）がその判断と責任において使用することは法の禁ずるところではない」と答弁し、つまり政府はピルの避妊への使用を認めたのである。以来ピルは避妊薬としての認可はないものの、実際は避妊目的でどんどん使用されることとなり、ピルをめぐる2重構造が出来上がっていった。

ピル承認への長い道のり、「バイアグラ」スピード承認が後押しして・・・

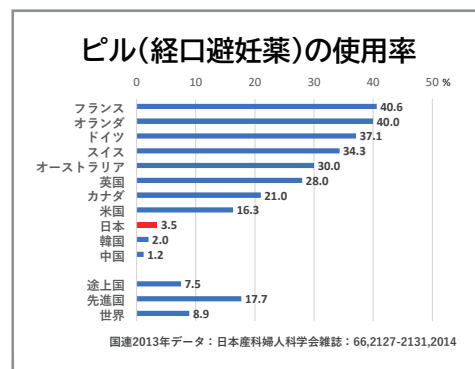
その後、早期承認に向けた専門家、関係者たちの取り組み・挑戦・・、エイズ蔓延を理由にピル承認の凍結、幾多の苦難の変遷があった。1998年7月忽然と登場した男性の勃起不全の治療薬バイアグラの使用申請があり、国内での臨床試験がないままに、異様なスピードで翌年認可された。程なくして、同年9月、欧米から遅れること約40年が過ぎて、ピルが正式認可されたのである。男性優位社会を浮き彫りにした、一方でのピルの認可となったことをしっかり記憶に留めておきたい。

ピル普及のための挑戦、そして新たに治療薬LEPの参入

低用量ピルが正式認可された1999年、たまたま私はクリニックを開設した。私たち世代の医師はほとんどピルの教育がないままにきた。たくさんの研修会・学会に参加しピルについて学んだ。当クリニックでもたくさんの女性にピルを処方してきた。ピル認可から22年が過ぎ、ピルをめぐる状況は大きく様変わりした。当初は避妊薬としての保険適応外のピルだけだったが、2008年月経困難症や子宮内膜症の保険適応治療薬として使用されるLEP（Low doses Estrogen Progestin）が認可された。いずれも基本的にはピルそのものである。LEPは日本だけのものであり、海外ではすべてピルとして扱われている。

避妊のためのピルがなかなか浸透しない日本

日本ではピルが正式認可されても、海外に比べれば普及率は極めて低率のままで推移し、いまだ数%に止まっている。当初ピルはもっと普及していくと期待していたが・・。ピルを飲んでいるとなかなか言えない、二人で避妊のことを会話できない、性に関わることは言葉にならず、あうんの関係で突き進む、経済的不安を抱えて、出会いと別れを繰り返すことに・・、勝手にいろいろと考えてしまう。



生涯未婚率は、増加の一途をたどり、2015年度は男性 24.2%、女性 14.9%だった。一方、夫婦のセックスレスも増加し、半数に達している。いまや日本人の性的活動性の低下は明らかである。ピルが普及しないのも致し方ない。

LEP の普及は日本社会を救うことでしょう

ピルが認可されてほぼ 10 年が過ぎ、保険適応のピルの登場に、当初現場はとても戸惑ったものだが、以来 10 年が過ぎて、現在当院のその処方数は、保険適応 LEP が保険外のピルをわずかに上回り、増え続けている。

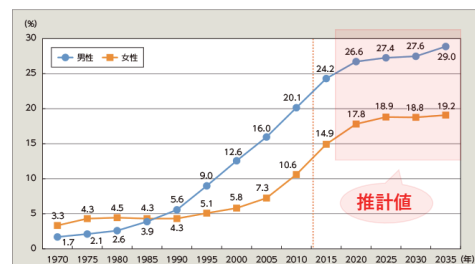
避妊用ピルと治療用 LEP の違いはといえば、いずれもエストロゲンとプロゲステンの合剤だが、エストロゲン (E2) の含有量が違うだけだ。ピルは E2 が 35 μg 、LEP は低用量化が進み 35 μg と 20 μg の 2 種類。E2 の低用量化は血栓症のリスクを軽減する。

女性にとって月経は生理的・普通の出来事でありながら、日常生活に支障が生じるほどの苦痛に悩む女性は決して少なくない。月経困難症と診断され、原因として子宮内膜症や子宮腺筋症、子宮筋腫が見つかることもある。ひどい月経痛を引き起こす子宮内膜症が急増しており、女性の 10 人に 1 人がかかると推定されている。子宮内膜症により不妊症とならないように医学的介入が必要になる。初婚年齢が上昇し、初産年齢が上昇している昨今であり、また体外受精児が出生児の 14 人に 1 人となった (2019) 異常な社会にあって、不妊症対策は喫緊の課題だ。月経困難症、子宮内膜症をしっかりと管理していかなければならない、そうした日本社会の事情が LEP 普及を大きく後押ししているのである。

私は医師になり、医学部卒業後すぐに結婚して 20 代で 2 人の子どもを産んだ。不妊症等まったく考えたことはなかった。なぜか日本社会は大きく様変わりしてしまった。長期化する日本経済の減速、若い世代の非正規雇用の拡大、慢性化する生活不安、…。若い時に結婚でき、妊娠・出産しても安定して働き続けられる、キャリアアップできる社会の実現はまったく展望できそうにない。今この現実には押しつぶされないように、女性が働き続け、自己実現できて、結婚が遅くなっても望むときに子どもを産めるように、産婦人科医師として力になりたいと思う。

LEP はピルと同質の薬剤です。避妊のためのピルは必要なくても、月経困難症、子宮内膜症治療・予防のための LEP を必要とする女性はたくさんいるでしょう。

生涯未婚率



平成27年版厚生労働白書より

私のオフタイム ～絵本の読み聞かせを通して～

看護師 菊地香織

私は月に 1 ～ 2 回、小学校で授業開始前に絵本の読み聞かせをしています。

絵本の内容は、季節や行事物を選ぶこともあります。基本的には、私が子どもたちに伝えたい内容のもので、学校生活を楽しく笑顔でスタートできるものを選んでいきます。

子ども達はどんな反応してくれるのか、また、その反応が嬉しくて次はどんな絵本を選ぶかと、私の楽しみ の 1 つにもなっています。子ども達が自分らしく、ありのままに楽しく過ごせるようなメッセージが伝わる読み聞かせを行えるよう、今後も続けていきたいと思っています。



臨時休診

年末年始の休診は HP でご確認ください。

編集後記

秋の風や虫の声が心地いい季節になりましたね。
今年最後のきよくり NEWS となりました。昨年に続き、今年もコロナに翻弄された一年でしたが、来年こそは穏やかな一年になると期待しています 😊



発行元：村口きよ女性クリニック
http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp
e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp